

アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ：

「ユダヤ人のブナの木」について

水 野 光 二

ドイツ文学の珠玉とも称されるドロステ＝ヒュルスホフの「ユダヤ人のブナの木」は彼女が散文として残した唯一の完成作であるが、1842年これが発表されると、たちまち評判になり、彼女の名は一躍世に知られるところとなった。

この物語もシラーの「犯罪者」同様、実際あった事件をモデルに書かれたものと言われており、彼女の場合、物語の中でこの話は実話であると、それを強調してさえいる。下敷きになった話というのは、子供の頃彼女が祖父から聞いたユダヤ人殺し事件で¹⁾、これは彼女の小説化に先立ってすでに1818年叔父の 아우グスト・フォン・ハクストハウゼンによって、「ある アルジェリアの 奴隷の話」という題名でルポルタージュ風の読み物として発表されており、ドロステが直接にはそれを種本として物語の想を練ったこともよく知られている。なにしろヴェストファーレンの、事件が起こったと言われる地方の、古い貴族の家柄に生れ²⁾、しかも事件からまだ60年経ったに過ぎない位のことだから、作者には物語を実話だと強調する強みもそれだけあったと言えるわけだ。

と言っても、しかし、「あるアルジェリアの奴隷の話」とこのドロステの「ユダヤ人のブナの木」を読み較べるだけでも、両者の間に随分大きな相違があることは直ぐに判るのだから、彼女が実話だと強調するのも、我々としては、小説上の戦略の一つという程度に受け取っておけばよい位のことだが、他方、今までハクストハウゼンの物語の方は、多少文学的な脚色が施されてはい

るだろうが、大要としては事件を忠実に記録したものだということに考えられてきたし、ドロステ自身そのように信じていたのだということが彼女の手紙によって跡付けられる⁸⁹。

ところが、最近の研究で特にこのハクストハウゼンのアルジェリア体験談に関する部分の考証を行ったミヒャエル・ヴェルナーがそれが全くハクストハウゼンの創作で、事実にもとづくものではないとの結論を下しているのである⁴⁰。その根拠とされているのは、体験談そのものに含まれる歴史的事実の矛盾のほか、ヴィンケルハネスは1805年ジェローム（ナポレオンの弟）によって解放された231名の奴隷の一人として自由の身となり、故郷に帰ったと言っているのだが、当時の記録から、解放された者たちの中にドイツ人はいなかった事実も明らかになったからである。

ところで、この物語は、今も述べたように、これまでもすでに多分に文学的な粉飾を施したものと見られてきたわけだが、その理由の一つには、例えばこの話に織り込まれた数の神秘的符合といった点を挙げることができる。と言うのは、物語によればユダヤ人ピンネスはヴィンケルハネスに17回打たれて死んだと述べられているのだが、その殺害者のヴィンケルハネス自身、アルジェリアでの奴隷としての悲惨な生活を17年送ったとされているのだからである。こうした多少話が出来過ぎと思われなくもない語り口に、ハクストハウゼンの遊び心ともいうべき面が感じとられてきたわけである⁹¹。しかし、それでも一応話の骨格そのものはあくまで事実だと思って読む者には、それは物語をより興味深くする上に効果があると言える位で、何と言っても人々は数奇な運命に好奇の心をそそられたと思われる。まさに、事実は小説よりも奇なりなわけなのである。恐らくアルジェリアという異国に対する人々の好奇心も大いに刺激されたことだろう。ヴィンケルハネスが望郷の念耐え難く、やっとチャンスを見付け、解放された奴隷の一人として故郷に戻ってきた時、逃亡からはや25年という歳月が経過していた。まるで西洋版浦島でもあるかのように、故郷に再び現れた彼は、哀れにもドイツ語も忘れ、最初は全くカタコトで己が数奇な運命を人々に語ったとか。

しかしこれがすべてハクストハウゼンの創作だったと言うのである。そういう目で見ると、確かに、何もかも話を面白くするために考え出された小道具に見えてくる。一逃亡して最初はオランダに行き水夫として順調な生活を送ったが、ジェノヴァで人の忠告を無視して、高い賃金につられ貨物船に乗り、案の定、海賊に襲われ、アルジェリアに連れていかれ奴隷に売られたこと。しかし、最初の主人には大事にされ、彼もよくつかえたため執事になったが、その主人が突然失脚、殺されてしまい、また奴隷に売りだされ、その後17年悲惨な生活を送ったこと、等々。これらを実話と思って読んでいた時には気にならなかったことでも、いったんフィクションの世界と思って読み出すと、我々には俄かに気がつくことがある。と言うのは、ヴィンケルハネスはまさに運命の岐路に立たされると、運の強さを発揮してそれを切り抜けていく、つまり、物語がこうした不運、脱出の繰り返しになっているということである。そもそも逮捕の時も彼は実家に潜んでいて、人々が逮捕令を受けて家を取り囲んだにもかかわらず、見付からずにすみ、故郷から姿をくらますことに成功したのだった。また、奴隷となってから、途中一度故郷に彼の手紙が届き、自分を今の状態から解放して故郷に戻れるようにして下さいと願い出てきた時、それを読んだ代官 H.n は、この男は戻って来てもどうせ人殺しの罪で法の手引き渡されることになるだけだと答えているが、25年の後彼が本当に故郷に戻った時には、代官はいったんは逮捕を命じるものの、考え直し、パーダーボルンの殿様の意見に従って、長い奴隷としての悲惨な生活は死にも値することだったろう、と彼をとがめなしの身にしてやっているのである。

しかし、この「あるアルジェリアの奴隷の話」は以上見てきたような冒険談としての波乱に富んだ生涯を面白く語ることに終始するものではなくて、それははっきりとした著者の意図のもとに構成されているのだということも判ってくる。と言うのも、かくも強運、というか悪運に恵まれたヴィンケルハネスが最後には自らその命を絶ってしまわなければならないのだからである。それと言うのも、故郷に戻ったヴィンケルハネスは法的には過去の罪を許されたが、しかし、兄弟からは見向きもされず、頼りと思った代官に雑用人として雇って

ほしいと願ひ出るが、「人殺しを家の中に置くのはやはり気持ちのよいことではない」⁶⁾と、きっぱり拒絶されてしまうからである。こうして人々から相手にされなくなった孤独の中で彼は死を選ぶのである。ハクストハウゼンの物語はこうして、犯した罪の処罰から人はついに逃がれきれないものであることを、因果応報の恐ろしさを描いているのである。それがドロステの「ユダヤ人のブナの木」のモチーフともなった、木に刻まれた言葉—《殺した犯人はろくな死にかたをしないだろう》⁷⁾—とも無気味な符合をなしつつ、それまでの物語の持っていた冒険談としての言わば陽性の描写から一転して、ヴィンケルハネスの結末の一層の哀れさを読者に強烈な印象として残すことになるのである。

さて、この物語を、「ユダヤ人のブナの木」の作者ドロステはどのように変えたのか。まず第一に指摘され得る最大の変更点は次のことである。すなわち、ここでは主人公フリードリヒは同じく（こちらはトルコとされてはいるが）異郷の地に奴隷として悲惨な生活を過したことになっているが、ドロステはそれについては簡単に触れるだけに止どめ、物語の大半を、逆に、ハクストハウゼンの方にはなかった、主人公の出生前から、幼年時代を経て、故郷を逃げ出していくまでの過程を描き出すことに費したということである。つまり、ドロステは、社会と犯罪者との関わり、その人の世における贖罪の問題を中心に据え、視点も、どうして彼が社会から逸脱していったのかを描き出すことに移したわけである。要するに、犯罪者の物語を彼の置かれた社会状況という環境要因の視点から眺めているということになる。ハクストハウゼンの物語のように、結果としての犯罪者和社会との関わりをだけではなくて、犯罪者を生み出す土壌としての社会を問題にしたのである。そのことは彼女がもともとこの物語を独立した作品としてではなくて、故郷ヴェストファーレンの風俗、習慣をテーマとした長編の中の一挿話として考えていたこと、題名についても、周知のようにこれはこの作品を「モルゲンブラット」に掲載したヘルマン・ハウフが付けたもので、彼女自身は最初「山深きヴェストファーレンの風俗画」としていた—これは副題に残された—ということなどからも判る。物語の冒頭にドロステが新約聖書の内容に関連する詩句を掲げたのも、そうした作者としての

視点をあらかじめ読者の前に明確にしたものと考えられるのである。

《人をさばく秤^{はかり}をすてよーそれは汝には許されていない。

人を打つ石^{こうべ}をすてよーそれは汝自身の頭にあたるだろう。》⁸⁾

それにもかかわらず物語が単なる傾向的作品に陥っていないのは、作者の主観を排し、出来事を淡々と述べていく彼女の語り口の即事性、主人公フリードリヒの内面的な変化を、その心理描写によって描くというより、対話場面をもってきたり、嵐の夜、森の暗さ、銀時計、木靴のヴァイオリンといった視覚的なイメージを通じての象徴性による暗示という、こうしたドロステの手法の鮮やかさによる。そもそもこの作品のように、人の生涯を扱うということがノヴェレにはなじまないことでありながら、写真に徹し、具象的なものから離れることのないそうした現実描写自体に込められた象徴的意味によって、物語は散漫になることもなく、統一と緊張を最後まで持続するのである。

その好例と言えるのが、ヴィーゼによって見事に明らかにされた、ブナの木を持つ象徴性である。そして、それがこの物語の表題になる契機にもなったのだった。

物語の進行と共に、最初はプレーダーホルツの一部であったに過ぎないブナの木が、やがて一本だけ、四囲の世界から切り離され、独立した独自の存在として浮び上がっていく。この過程そのものがまたフリードリヒが村共同体の中から脱落して、犯罪者としての有徴性を帯びた存在となっていく過程と象徴的な同時進行をなす。それはユダヤ人アーロンがブナの木ところで殺されているのが発見される場面において決定的となる。そして、犯人は追及の手を逃れるものの、ユダヤ人仲間によってこの木に刻み込まれた言葉は、ここで命を落したアーロンの無念を「その後もずっとつなぎとめておくばかりではなくて、殺した人間をもこの神秘的な木との逃れることのできない同一化へと駆り立てるのである。」⁹⁾ と言うのも、物語の最後でフリードリヒが首をくくるのは、この「ユダヤ人のブナの木」なのだからである。物語の中ではヘブライ文字のまま出てきていた、言葉の迷めいた意味は最後になって明かされる。

《お前がこの場所に近付いた時

私にしたことが、お前の身にも起こるだろう。》¹⁰⁾

ちなみに死体を発見するのは奇しくも森林官ブランディスの息子である。こうした写実性と神秘性との不思議な混淆が作品に独自の味わいを与えているのである。

ただ、ヴィーゼの結論するように、こうしたブナの木象徴性によって、損壊せられた宇宙的な秩序の自己回復が顕されるとまで解釈を拡大していくのは¹¹⁾、いささかこの作品の意図を外れていってしまうものと思われる。むしろ、我々は作品の主題については、あくまでも人間社会の内での罪と贖罪の問題に立ち戻って考える必要があるように思うのである。

このことについて考えていく上で、再びハクストハウゼンの物語との大きな相違の一つとして指摘できるものに、ドロステがここに主人公フリードリヒの犯罪者への決定的な転落のプレリュードとして、森林官ブランディス殺しのエピソードを挿入したことを挙げることができる。もちろん、それは物語の中で語られるように、彼が直接この殺害に関与したというのではなくて、あくまでも間接的に、嘘の道を教えた結果がブランディスの死につながったということなのだが、フリードリヒは直後自分のなした行為の罪深さに苦しむことになるにもかかわらず、結局叔父ジーモンの、仲間を裏切るな、と言う言葉に従って、自己の内面の良心の声を圧殺してしまうのである。

しかし、このエピソードはまた別の観点からも、そこに重要な意味の存することを指摘し得る。と言うのは、フリードリヒはこのように間接的に森林官殺しに、また直接ユダヤ人殺しに関与するのであるが、これら彼に関わる事件の被害者たちは、いずれも彼と同様にこの排他的な村共同体の中では言わばアウトサイダーたちだからである。いや、彼と同様と言うのは必ずしも正しくない。と言うのは、メルゲル家が母親の結婚に際しての意気込みにもかかわらず、父ヘルマンの飲酒癖によって一層その零落の度を加えて、共同体の中での恥辱の対象となっているにもかかわらず、意識としては、共同体の持つ狭い偏見から少しも出るものでないことが、フリードリヒが母に対してなす質問に、彼女が次のように答えることによって明確に表出せられるのだからである¹²⁾。

「《フリッツ、》と彼女はいった、《お前はこれからもおとなしくして、母さんを喜ばせてくれるかい。それとも、行儀の悪い子になって、嘘をついたり、酒飲みになったり、人のものを盗んだりするかい。》—《母さん、ヒュルスマイヤーは人のものを盗むんだって。》—《ヒュルスマイヤーがかい。とんでもない。そんなことを言うとお承知しないよ。誰がそんなひどいことをお前に教えたんだね。》—《あの人はこのあいだアーロンをぶんなぐって、六グロッシェンとっちゃったんだよ。》—《彼がアーロンから金をとったんだったら、それは、前にきつとあの呪われたユダヤ人にその金をだましとられたことがあるからなんだよ。ヒュルスマイヤーは、昔からこの村にいる、ちゃんとした人だけど、ユダヤ人なんてものはどれもこれも悪党ばかりだからね。》—《でも、母さん、ブランディスは、あの男は木や鹿も盗むんだ、とも言ったよ。》—《まあ、ブランディスは森林官じゃないか。》—《母さん、森林官は嘘つきなの。》

マルガレートはしばらく黙り、やがてこう言った。—《お聞き、フリッツ、木は神様が自由に大きくして下さるものなんだし、けものはあちらの領地からこちらの領地と動き回るんだし、誰のものと決まってるものではないんだよ。でも、お前にこんなことを言っても、まだよく分からないだろうがね。……》¹³⁾

すでに父親の零落した姿によって村のもの笑いの対象となっているメルゲル家にとって、この閉鎖的な村社会から最後の排斥を受けないためには、フリードリヒはそこに妥当する規範に、自己を抑圧しても適合させていかなければならない。そうでなければ、彼はこの共同体から脱落を余儀なくされるだけであり、それは結局彼にとってこの狭い社会にあって生存そのものが脅かされることを意味せざるを得ないからである。森林官や、ユダヤ人のように、この村社会の中でアウトサイダーであっても、自己の生存の基盤がメルゲル家のように脆くはない者たちもいるが、それは職業的權威によって身を支えているか、金銭的な力が身を守っているかで、他方、それに較べるとフリードリヒには最初からそのどちらも与えられていないのだからである¹⁴⁾。自己の良心というのがこうした場合いかに脆いかは、フリードリヒがやがて、母の手から離れ、叔父ジーモンの手委ねられることによって一気に明らかにせられていく。母

との対話に予示せられていたこの村共同体の社会的規範そのものを具体的に象徴化したのがジーマンと言う存在であり¹⁵⁾、そこでは母に内在していた、背反するいま一つの側面である、神への祈りによって示される敬虔さは、すっかりなくなってしまっており、むしろ、それは自分を共同体から転落させる危険な因子として、意識的に抑圧せられさえもするのである。フリードリヒはこうしてジーマンを通して、祈ることを忘れ、やがて自己の存在を機会あるごとに誇示しようとする虚栄の虜になっていく。

姉の結婚以来姿を見せたことのなかったジーマンが突然やって来て、フリードリヒを養子にし、自分の仕事を手伝わせたい、とマルガレートにもちかけるのは、フリードリヒが十二の時だったが、この時彼は叔父の目にはまだ「無口で、ひっこみ思案」の子供で、「ほかの奴らに二三度したたかぶんなぐられた」ことが原因で、ひどく臆病になっていた¹⁶⁾。ところが、それから六年経って、彼が十八になった時には、村で「ある賭けをして勝ち、若い連中の中であいつもなかなかやるじゃないかと評判」になった。そしてそれを機に、彼はやがて「その後、ますます外見を気にするようになり、次第に、金がないため村の誰かにひけをとる、というようなことは我慢できない」までになっていくのである¹⁷⁾。

ところで、こうしたフリードリヒの内面的な転機を象徴的に示すのがヨハネス・ニーマントの出現であることは、従来指摘されてきた通りである¹⁸⁾。明らかにジーマンの私生児と思われ、フリードリヒに瓜二つのヨハネス。この、しかし、言わばフリードリヒの分身たるヨハネスの登場と共に、フリードリヒ自身は幼年時代と訣別し、他方、ヨハネスがとり残された幼年時代のままのフリードリヒとして以後映し絵のように、影のように彼につき従うことになる。

このヨハネスが初めてマルガレートの前に姿を現す場面は、そういう意味でも非常に象徴的に描かれている。フリードリヒが帰って来るのを待っていた母は、台所に戻ったところで、暗がりに息子の姿を認め、声をかけるが、相手はわけの分らぬ言葉をつぶやぐだけで、要領を得ない。どことなく様子が変わったと思うものの、彼女は息子だと思い込んでいる。そこへ母から大声で名を呼ば

れた当の本人が、寢室から手に木靴のヴァイオリンを持って出て来る。

「わざと威厳を見せ、自分は一人前なんだと言わんばかりの態度で、真っすぐ、自分の生き写しのような、そのいじけた子供の方に向かってフリードリヒは歩いていった。それがこの瞬間、他の点ではとても似ているこの二人の間にある相違を際立たせていた。

《さあ、ヨハネス》と言って、彼はおおように、楽器を相手に手渡した。
《約束したヴァイオリンだよ。おれはもう遊んでいられないんだ。これからは金儲けをしなくちゃならないからな。》」¹⁹⁾

こうして以前とは別人のようになったフリードリヒだが、ただ、仕事のことについて言えば、根気のいることが嫌いで、結局もとのように牧童になるが、それはもう彼の年齢には似合わない仕事なので、人から「時折意外な嘲笑を招いた」りする。しかし、以前のフリードリヒと違うのは、今では「粗暴にげんこつをおみまいして相手を黙らせる」ことが出来るようになってきていることだった²⁰⁾。彼は村でも一目おかれる存在になったのである。

しかし、こうしたフリードリヒの頭の中では己れを誇示し、村で自分が重きをなす存在となったものと思い込んでいるのが、一皮はげば、いかに錯誤にすぎず、脆いものであるか、やがて容赦なく暴露されてしまう。

森林官ブランディスが殺された時、裁判所の書記がまっ先に彼に疑いの目を向けるのもその一例である²¹⁾。しかし、彼が罪の道へと足を踏み込んだとすれば、それは叔父ジーモンを通じて「青衣団」(Blaukittel)の見張り役として森林あらしに関わっていたことそれ自体によってではなくて、前にも触れたように、むしろ、メルゲル家の惨めな状態を嘲ったブランディスに対し、一時的な怒りからとは言え、嘘の道を教えたのが、思いもよらず彼の死を招いたことに悩み、ついに良心の呵責にたえきれず、教会に告白に行こうとしたのを、ジーモンによって断念させられてしまうことによってなのである²²⁾。

「《十戒を忘れるなよ。汝隣人に不利となる証言をするなかれだぞ。》 — 《偽証するなかれだよ。》 — 《いいや、証言なんかするなだ。お前は間違ったことを覚えたんだな。告白で他人の罪を訴えるような奴には聖体を拝領する資格が

ないんだぞ。』」²³⁾

それ故、このジーモンとの対話は、犯罪者へと転落するフリードリヒの決定的な内面的転機を示す場面をなすものとして重要である。これについては作者ドロステが物語の初めの所で次のように述べていることと関連しているからである。

「あの時代を公平な目で捉えることは易しくない……けれども、これだけは主張することが出来る。当時形式は今より不備だったが、核にあるものはしっかりしていた。犯罪は今より頻繁になされたが、破廉恥なことは稀だったと。と言うのも、自己の信念にもとづいて行動する者は、たとえその信念がいかに欠点のあるものだとしても、だからといってそのため完全に破滅したりはしない。それに対し、内面的な正義感情に反して外面的な正義を要求することほど、人のたましいをむしばむものはないのである。』」²⁴⁾

フリードリヒは自分の内面的な正義感情に従うか—その場合彼は裏切者になる—それを抑圧して仲間にとどまるか、選択を迫られるのである。結局彼は後者を選ぶのだが、そのことによってと言うよりも、むしろすでにそうした選択が彼に突き付けられること自体が、言ってみれば、彼にとってはたましいをむしばむことなのである。なぜなら、こうした岐路にたたされた彼に自己を貫けるほど、自分の足もとが盤石ではないことは自身一番よく知っているわけであるし、また、彼の外に向って己れを誇示しようとする心も、まさにそうした自己の内面的な脆さをこそ忘れようとしての虚栄なのだからである。

やがて身を着飾ようになっていくフリードリヒの外に向けられる自分と、内なる自分との心の中でのせめぎあいについて、作者ドロステは、このジーモンとの対話の後、次のようにも語っている。

「彼は生来決して卑しい人間というのではなかったが、外に対する恥に較べれば、内面的な恥辱の方をまだましだと思うことに慣れていった。自分の母親の貧乏暮らしをよそに、彼が身を飾って他人に見せびらかすようになっていったことを述べるだけで十分だろう。』」²⁵⁾

こうした彼の外に向けられた、つくり物の自分の空疎は、ブランディスの事

件から4年経ったある日、村の結婚式でついに徹底的に暴かれてしまう。森林官殺しの時もそうだが、フリードリヒのこうした内なる脆さが露呈する時に限って、分身のヨハネスが登場する²⁶⁾。この結婚式では、しかし、まずはフリードリヒは一座の顔役として、人々に指示を出し、また、踊りの演奏者の一員となって自らヴィオラを奏でるなど大活躍ぶりに得意になっている。やがて領主たち一行も到着し、乾杯となり、式がまさに最高潮に達した時、ヨハネスのバターどろぼうが発覚し、座は大混乱に陥る。人々の嘲笑と軽蔑を一身に浴びた哀れなヨハネスに向かって「この乞食犬め」と怒鳴りつけ、打ちすえ、外へ追っぱり出すフリードリヒの姿は、まさに鏡像に向って打ちかかる者のそれである。

「彼は悄然として戻ってきた。彼の面目は傷付けられ、みんなの笑い声がくいいるように胸にひびいた。」²⁷⁾

態勢を整えるため、一層虚栄をはり、フリードリヒは「当時としては珍しい高価な」銀の懐中時計を取り出し、人々に見せびらかす。しかし、それは結果的に彼の空虚さを一層鮮明にするのに役立つだけだった。と言うのも、それは借金で手に入れたもので、払いがまだ全然済んでいないのだからである。村の若者たちに、そのことをつかれるが、答えはフリードリヒの口から聞きださずとも、直ぐに明らかにされる。アーロンがやって来て、大声で人々のいる中、彼に代金の催促をするからである。式が終る頃、フリードリヒの姿はもうそこにはなかった。そしてユダヤ人が彼を追って出ていった後には、人々の哄笑が渦を巻くのだった。例のブナの木の下でアーロンが死体となって発見されるのは、それから三日後である。疑いは直ちにフリードリヒに向けられるが、彼は追及を逃れ、村から姿を消してしまう。以来彼の消息は杳として分らず、28年の歳月が流れるのである。

そして物語は再び彼が故郷に戻ってきた所から始まるが、この最後の部分もドロステはハクストハウゼンの物語の結末と較べ大きく変えている。と言うのも、この帰郷した男を村人は暖かな心で迎えるのだからである。領主は長い年月異教徒の支配するトルコで奴隷になっていたと言うこの哀れな男の身の上に

深い同情を寄せ、食事、寝泊の世話をし、また男の申し出を入れ、使い走りとして働かせる。もっとも、だからと言って、これを直ちに、犯罪者に対し人々がその過去の罪を許した和解の心の現れと受け取ったり、ヴェスラーの言うように、作者ドロステが、そうすることによって、ハクストハウゼンの物語では非寛容に描かれていた祖先を寛容な人々として描き、美化しようとしたものとまで考えてしまうのは早計である²⁸⁾。なぜなら、男が自殺し、それを検死した領主によって初めて実はフリードリヒだったと確認されるまで、人々は彼をヨハネスだと思って接しているのだからである。フリードリヒの母親がヨハネスを息子と間違えたあの誤認のモチーフともいえるべきものをドロステはここで繰り返しているのだからである²⁹⁾。

けれども、他方、作者はこの帰郷後の話に物語を移す前に、二人が村から姿を消して半年ばかりの頃、領主のもとに、アーロン殺しを自白した男が別におり、フリードリヒは犯人ではないと思われる、と書かれたP裁判所長からの手紙が届いた、とも語っている。ただ、アーロンという名は珍しくないし、自白した男が取り調べの終らぬうちに自殺したため、確実なことは曖昧なままだと言うのだが。いずれにしても、しかし、領主がフリードリヒの汚名をすすぐため、故意にその噂を広めたので、村では誰もが彼の無実を信じているというのであった。

それ故、帰ってきた男に対し、どうして犯人でもないのに村から逃げ出したのかと人々は尋ねるのだが、それを聞くと、フリードリヒの方は「じゃあ、なんにもかも無駄だったのか」と、深い溜め息をつく³⁰⁾。こうしたところから、フリードリヒは実際犯人ではなかった、あるいは、少なくとも作者ドロステは、そう断定せず、事実は判らないものとして描き、解釈を読者に任せる形をとったのだと考える研究者もいる³¹⁾。しかし、そうだとすると、犯人でもなく、しかも人々に暖かく迎えられた彼（フリードリヒであるにせよ、あるいはヨハネスならなおさら）が、その後なぜ突然自殺するのが、謎になってしまう。

やはりアーロン殺しの犯人はフリードリヒだったと考えるべきなのである。と言うのも、検死に際して体の傷が本人確認のきめてとされるのだが、これ

は、レレケが述べるように、20年目に国に帰ったオデュセウスを乳母エウリュクレイアがその足の古傷によって主人と認めたモチーフをドロステがここで使っていると指摘できるばかりでなく、またその傷にはフリードリヒの贖罪されざる罪を暗示するものとしての象徴的意味がこめられているとも考えられるのだからである³²⁾。それ故、ドロステが、今みたように、念入りにもフリードリヒ＝ヨハネス誤認のモチーフと手紙によるアーロン殺し犯人別人説の二つを物語に組み込んで、村人にとつては、無実の罪のために逃亡を余儀なくされていた男が、やっと28年ぶりに戻ってきたのだという形にしているのは、彼女の意図が別のところにあったための必要から、つまり、それによってフリードリヒを人々が暖かく迎える形にする上での自然さを作り出しておく必要からそうしているのだと考えられるのである。もしそうではなくて、ハクストハウゼンの物語がそうであったように、帰郷したこの犯罪者に対して、人々の心がついに開かれることなく、彼が孤独と絶望の中で死に追い込まれてしまうのであれば、法、あるいは正義と言うものの持つ意味から個としての人間の内面感情というものは完全に締め出されてしまい、個人にとって正義とは全く社会から一方的に押し付けられるだけの意味しかなさず、そこには人の自由というものの発現する場がなくなってしまう³³⁾。ドロステにとっては正、不正についての判断の最終的な拠り所をなすのは、決してその社会に支配的な考えではなくて、あくまでも最終的には個人の良心でなければならないのである。むしろそうした意味から、正義の普遍妥当性というものにこそ作者ドロステは懐疑の目を向けていると言えるのである。

フリードリヒの自殺は、それ故、村人の暖かさにふれた彼がこの自己の内面感情から贖罪を己が身に受け入れたことを意味するものと考えられるのである。それは同時に社会に対する彼の側からの和解行為と言うべきものでもあったと言えるだろう。しかし、彼はヨハネス・ニーマントとして故郷に戻り、ヨハネスのまま自ら命を絶ってしまった。これに対し、村人はニーマントとしての彼には暖かく接したが、自殺の後フリードリヒだったと判った時にも、人々は彼にこの共同体の仲間であることを否認しなかったと言えるだろうか。最後

にもう一度ハクストハウゼンの物語とこの点での比較をすると、ヴィンケルハネスは孤独感の中で自殺したが、人々は彼をキリスト教徒として埋葬した。一方、「ユダヤ人のブナの木」の方では、作者ドロステは、ただ即事的にこう報告するだけなのである。

「死体は皮剥場に埋められた。」³⁴⁾

異教徒の支配するトルコに奴隷の身となっていたフリードリヒの故郷に戻りたいという情熱を支えたのは、しかし、せめて死後はカトリック教徒として葬られたいという願いだったのだが……

参 考 文 献

Annette von Droste-Hülshoff: Die Judenbuche. Reclams Universal-Bibliothek. Nr. 1858.

Erläuterungen und Dokumente: A. von Droste-Hülshoff. Die Judenbuche. Reclams Universal-Bibliothek. Nr. 8145.

Königs Erläuterungen und Materialien. Bd. 216. Annette von Droste-Hülshoff. Die Judenbuche.

Zeitschrift für deutsche Philologie. Bd. 99 (1979) Sonderheft: Annette von Droste-Hülshoff. Die Judenbuche.

Benno von Wiese: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka. Bd. 1 (1956) Bagel.

Winfried Freund: Die deutsche Kriminalnovelle von Schiller bis Hauptmann. (1975) Schöningh.

Heinz Rölleke: »Annette von Droste-Hülshoff: Die Judenbuche« In: Romane und Erzählungen zwischen Romantik und Realismus. (1983) Reclam.

Josef Kunz: Die deutsche Novelle im 19. Jahrhundert. (1978) Erich Schmidt Verlag.

「ユダヤ人のブナの木」ドロステ＝ヒュルスホフ作，番匠谷英一訳，岩波文庫。

注

- 1) この事件が1783年2月10日に起ったものであることが，ヴィルヘルミーネ・アントネッテ・フォン・ハクストハウゼンが兄カスパール・モーリッツ・フォン・ハクストハウゼンに宛てた同年3月3日付の手紙によって知られる。Erläuterungen und Dokumente (Reclam), S. 26f.
- 2) ちなみに「あるアルジェリアの奴隷の話」に出てくる Drost H.. n (カスパール

- ・モーリッツの息子のヴェルナー・アドルフ・フォン・ハクストハウゼンのことで、これが作者ドロステの祖父にあたる)の Drost とは代官という意味である。
- 3) 1839年8月24日付クリストフ・ベルンハルト・シュリューター宛の手紙。Erläuterungen und Dokumente (Reclam), S. 45f.
 - 4) Michael Werner: »Dichtung oder Wahrheit?« In: ZfdPh, S. 30.
 - 5) Erläuterungen und Dokumente (Reclam), S. 32; Winfried Woesler: »Die Literarisierung eines Kriminalfalles« In: ZfdPh, S. 7f.
 - 6) August von Haxthausen: »Geschichte eines Algierer-Sklaven« In: Erläuterungen und Dokumente (Reclam), S. 42.
 - 7) ibid., S. 36.
 - 8) »Die Judenbuche«, S. 3; cf. 新約聖書マタイ伝第7章第1節, ヨハネ伝第8章第7節。
 - 9) Benno von Wiese (1956), S. 169f.
 - 10) »Die Judenbuche«, S. 59.
 - 11) Benno von Wiese (1956), S. 170f.
 - 12) Benno von Wiese: »Porträt eines Mörders« In: ZfdPh, S. 36.
 - 13) »Die Judenbuche«, S. 10f.
 - 14) Winfried Freund: »Der Außenseiter ‚Friedrich Mergel‘« In: ZfdPh, S. 111.
 - 15) ibid., S. 115.
 - 16) »Die Judenbuche«, S. 13.
 - 17) ibid., S. 22.
 - 18) Wiese (1956), S. 163; Heinz Rölleke, S. 343.
 - 19) »Die Judenbuche«, S. 18.
 - 20) ibid., S. 22.
 - 21) Winfried Freund (1975), S. 66.
 - 22) Josef Kunz, S. 47; Helmut Koopmann: »Die Wirklichkeit des Bösen in der ‚Judenbuche‘ der Droste« In: ZfdPh, S. 78.
 - 23) »Die Judenbuche«, S. 35.
 - 24) ibid., S. 4.
 - 25) ibid., S. 36.
 - 26) Freund (ZfdPh), S. 112.
 - 27) »Die Judenbuche«, S. 39.
 - 28) Woesler, S. 15f.
 - 29) Rölleke, S. 343.
 - 30) »Die Judenbuche«, S. 51.
 - 31) Freund (1975), S. 68f.; また, Königs Erläuterungen und Materialien. Bd. 216 に掲載されたこの作品についての従来の主な解釈の抜粋を読むと, Heinrich Henel, Albrecht Diem などがこうした立場を取っているようである。

32) Rölleke, S. 344, S. 346f.

33) ハクストハウゼン自身は著者の立場から、「あるアルジェリアの奴隷の話」の結語として、17年に及ぶ苛酷な奴隷生活にも耐え抜いた不屈で、絶望に陥ることを知らぬヴィンケルハネスも、罰の与えられない、自由の身には耐え難く、自らその運命を遂行せねばならなかった、と述べているが、物語を読む限りの印象としては、私には先に述べたように、人々の閉じた心が彼をそこまで追いこんでいったように感じる方が強い。恐らくドロステもこれを読んで同じように感じたであろうと思われる。だからこそ、彼女はフリードリヒが村人に実際に暖かく迎えられるような形に直す必要を感じたのだとも考えられる。

34) »Die Judenbuche«, S. 59.